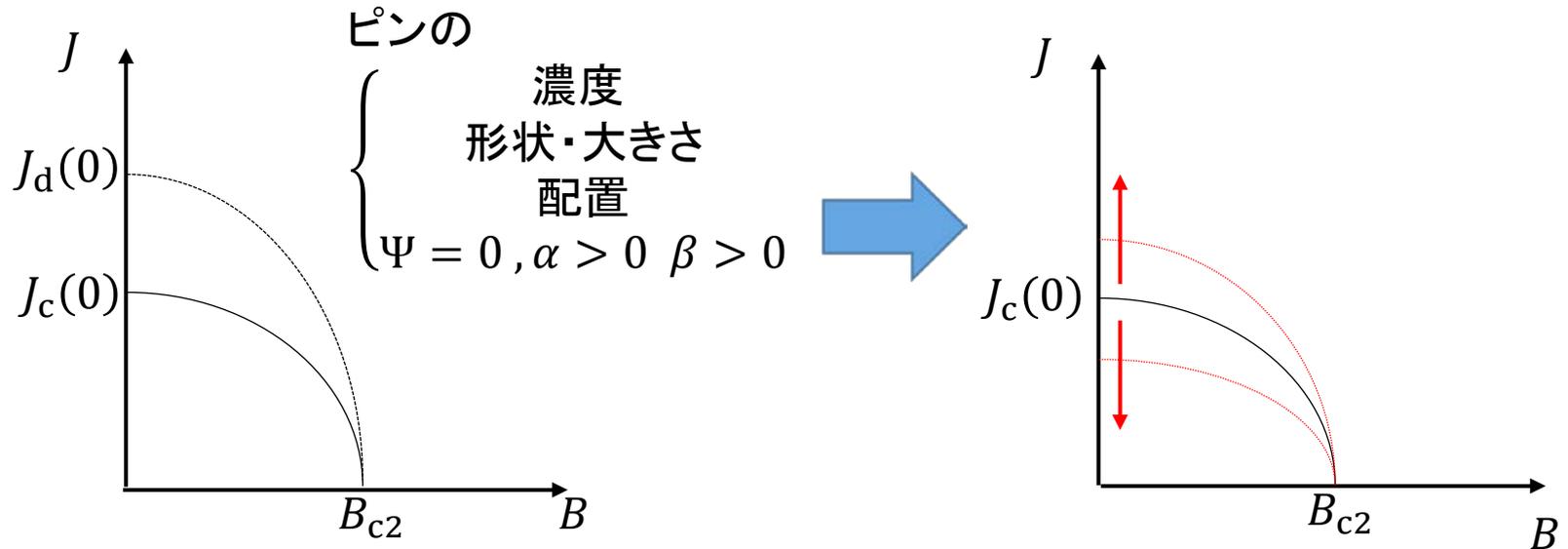


時間依存Ginzburg-Landau方程式を用いた
横磁界下における超伝導体内の磁束線についての研究

2016/09/15

九州工業大学大学院 情報工学府 谷村賢太、
小田部荘司

背景



横磁界下での超伝導体内の磁束線において、理論上、磁束線を留めるピンについての様々な条件の違いによって、 J_c が変化すると予想されている。しかし、それを確認することは容易ではない。

研究目的

本研究では、簡易化した3次元の時間依存G-L方程式をシミュレーションを用いて解くことによって、横磁界下での超伝導体内の磁束線において、ピンの濃度、形状・大きさ、配置、境界条件の違いが J_c にどのような影響を与えるのかについて調査を行う。

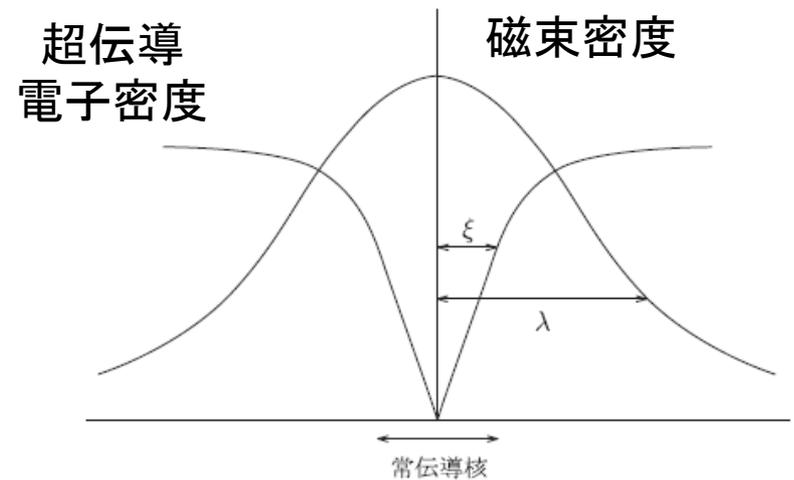
GL方程式・TDGL方程式

- Ginzburg-Landau(GL)方程式

- 超伝導を説明する現象論
- オーダーパラメータ ψ を計算
- $|\psi|^2$:超伝導電子密度

- 時間依存GL(TDGL)方程式

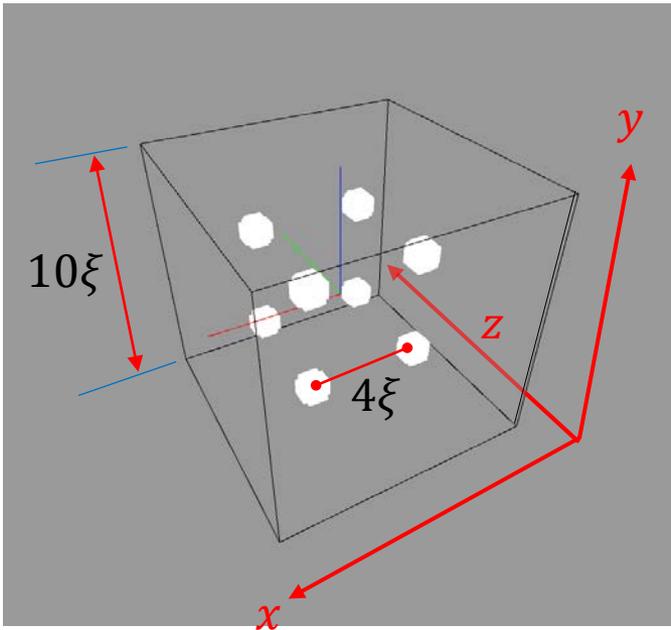
- GL方程式に時間依存性を付与したもの



シミュレーションモデル

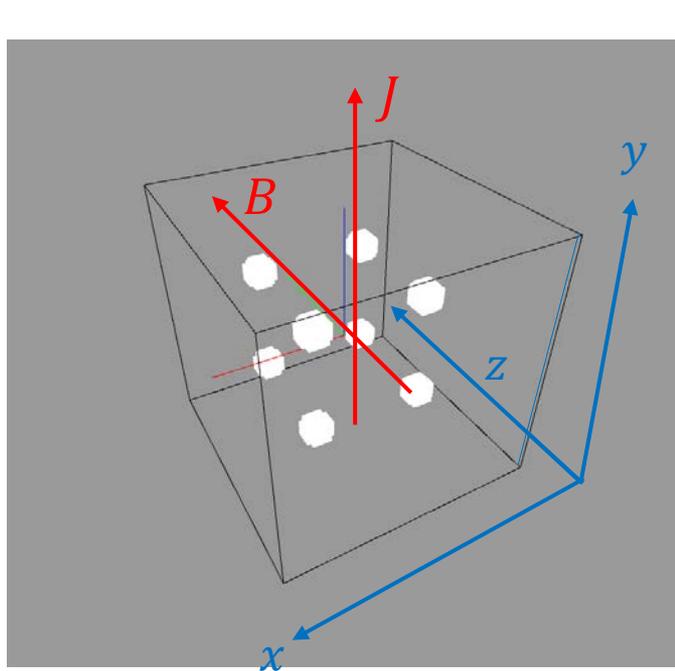
■形状

- ・真空に囲まれた超伝導体を仮定
- ・一辺の長さ 10ξ の立方体空間を考慮
- ・球型のピン(直径: ξ)
- ・隣り合ったピンの中心間隔: 4ξ



※軸設定は右図のとおり

シミュレーションモデル



■ 電流密度 J ・磁束密度 B

- $J = J_y \mathbf{i}_y$, $B = B_z \mathbf{i}_z$ ($\because J \perp B$)
($\mathbf{i}_x, \mathbf{i}_y, \mathbf{i}_z$: それぞれの軸の単位ベクトル)

■ 初期条件

- $\Psi(t = 0) = \cos\theta + i \sin\theta$
- $V(t = 0) = -Jy/\sigma$

■ 境界条件

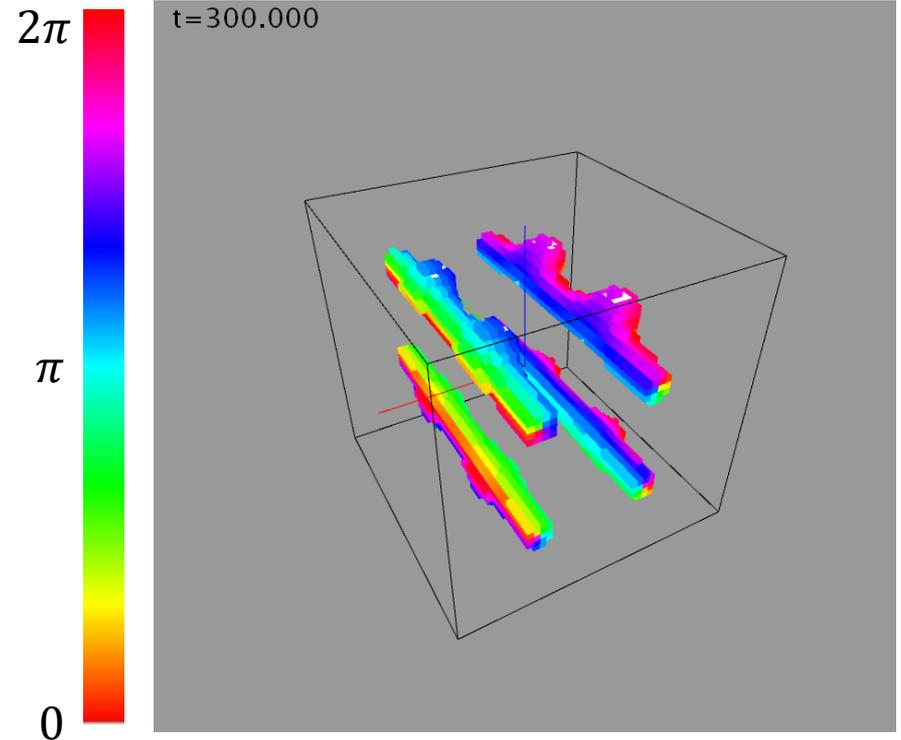
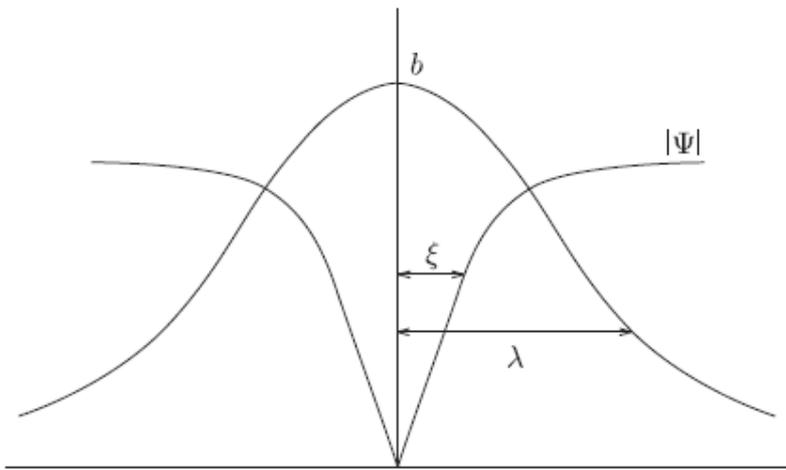
- $\mathbf{n} \cdot (\nabla\Psi + iA\Psi) = 0$
- $\nabla V = -J/\sigma$

※ \mathbf{n} : 面に垂直な単位ベクトル

プロットについて

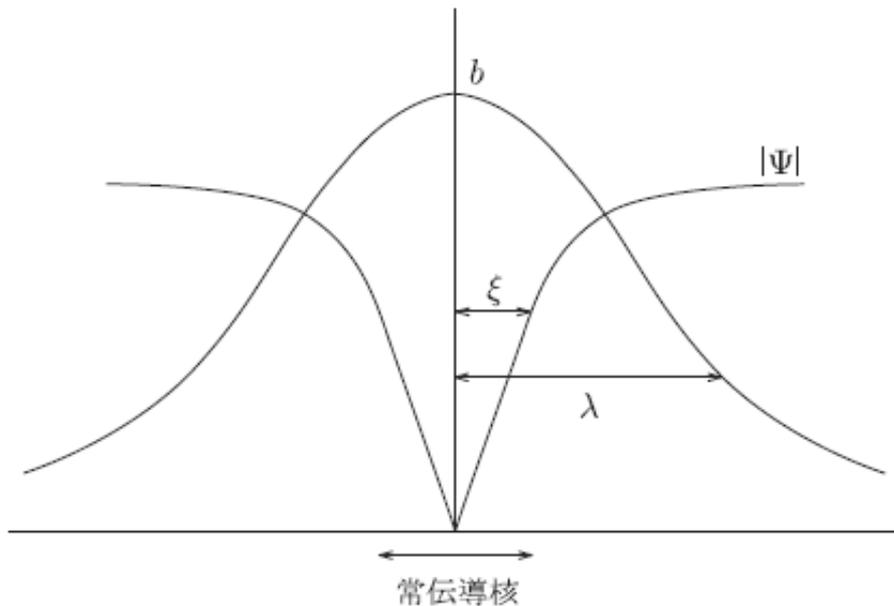
● $|\Psi|^2$ についてのプロット

- ・ $|\Psi|^2 \leq 0.1$ の等位面により磁束線の構造を表示
- ・ 位相に準じて色分け



TDGL方程式の簡易化

1. 非常に細い超伝導体を仮定
2. TDGL方程式でパラメータを規格化



1. 非常に細い超伝導体を仮定

全体に磁界が進入するほどの超伝導体を仮定



ベクトルポテンシャルが磁界に支配される



ベクトルポテンシャルが磁界に依存する変数

具体的には

$$A = B_{\text{ext}} y \mathbf{i}_y$$

$$(B \perp J)$$

$$(J = J_y \mathbf{i}_y)$$

2. TDGL方程式でパラメータを規格化

$$\frac{1}{\xi} x \rightarrow x, \quad \frac{|\alpha|}{\gamma} t \rightarrow t, \quad \frac{2e\gamma}{|\alpha|} V \rightarrow V,$$

$$\frac{1}{\sqrt{2}\kappa B_c \xi} \mathbf{A} \rightarrow \mathbf{A}, \quad \left(\frac{\beta}{|\alpha|} \right)^{\frac{1}{2}} \Psi \rightarrow \Psi$$

$$\frac{\partial \Psi}{\partial t} + iV\Psi + (-i\nabla - \mathbf{A})^2 \Psi - \Psi + |\Psi|^2 \Psi = 0$$

※ $\left(\frac{2}{3}\right)^{\frac{3}{2}} \frac{1}{\sqrt{2} J_c} J \rightarrow J$ となるため $J < \left(\frac{2}{3}\right)^{\frac{3}{2}} \frac{1}{\sqrt{2}} \approx 0.385$ に設定

実際に解く方程式

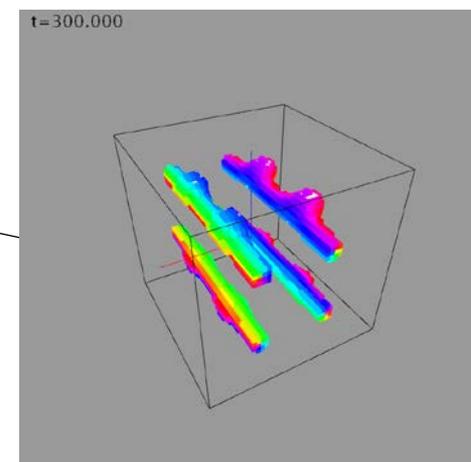
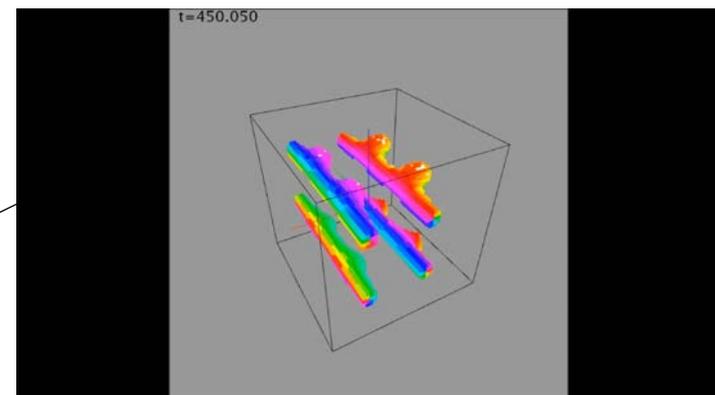
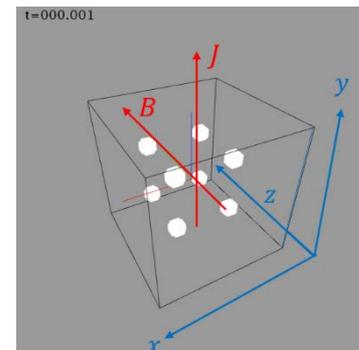
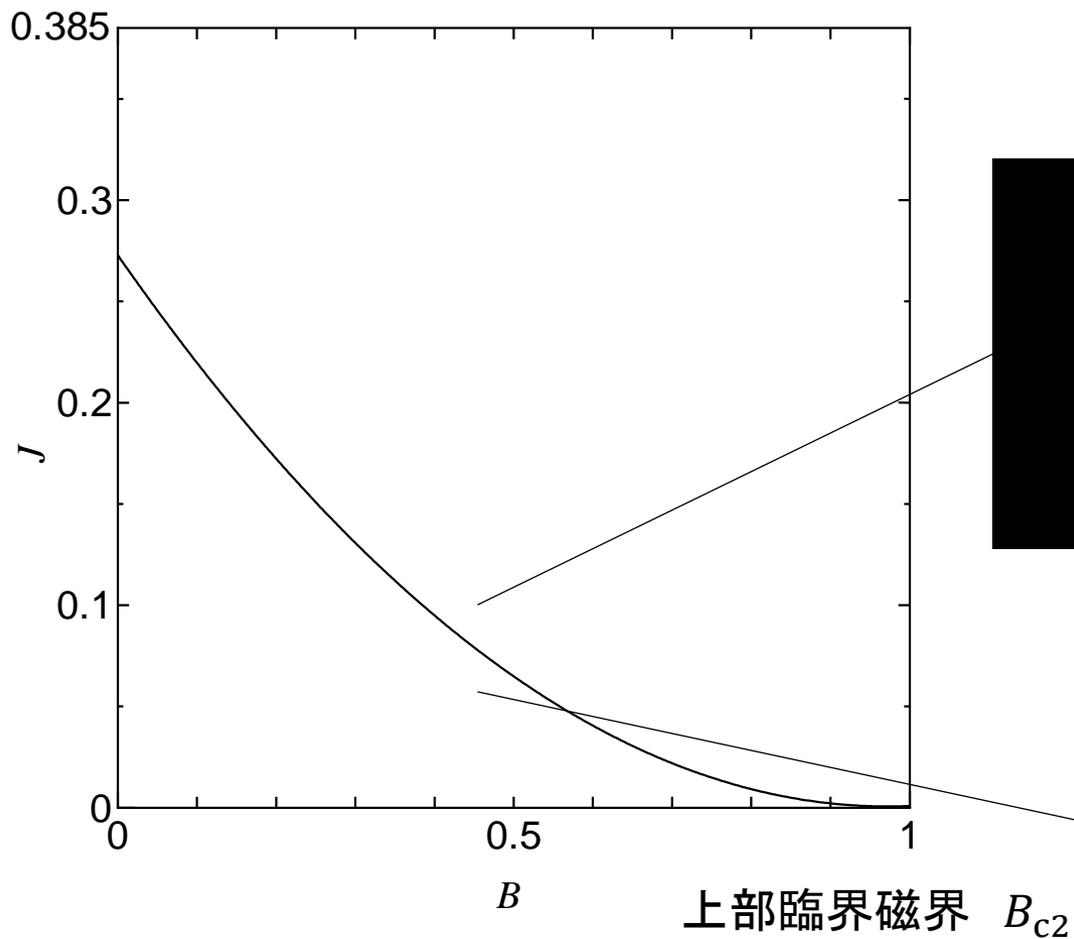
$$\begin{cases} \frac{\partial \Psi}{\partial t} + iV\Psi + (-i\nabla - \mathbf{A})^2\Psi - \Psi + |\Psi|^2\Psi = 0 \\ \sigma\nabla^2 V = \frac{i}{2}(\Psi^*\nabla^2\Psi - \Psi\nabla^2\Psi^*) - \nabla \cdot (|\Psi|^2\mathbf{A}) \\ \left(J_s = \frac{i}{2}(\Psi^*\nabla\Psi - \Psi\nabla\Psi^*) - |\Psi|^2\mathbf{A}, J_n = -\sigma\nabla V \right) \end{cases}$$

第一方程式：超伝導領域の Ψ について

第二方程式： V について

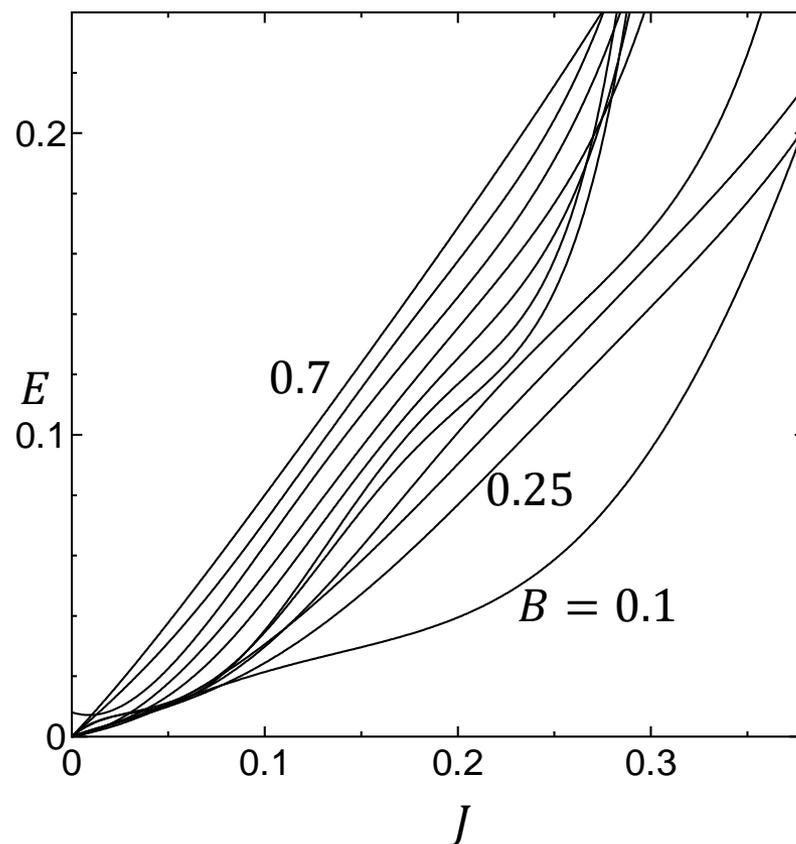
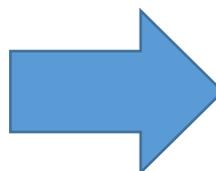
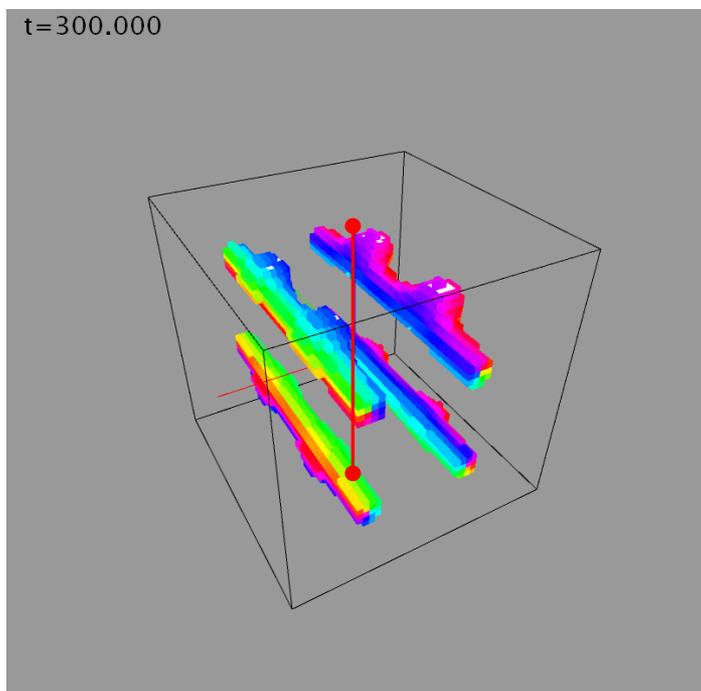
※常伝導領域は強制的に $\Psi = 0$

シミュレーション結果



E - J 特性

$$\mathbf{E} = -\nabla V$$



$B = 0.25 \sim 0.7$ まで0.05刻み
グラフ1番下の曲線は $B = 0.1$

常伝導部 $\Psi = 0$ の シミュレーションの問題点

常伝導部分で強制的に
オーダーパラメータ $\Psi = 0$



非常に強いピン
現実的でない



常伝導部の $\Psi = 0$ に代わる方程式の導入

$$\frac{\partial \Psi}{\partial t} + iV\Psi + (-i\nabla - A)^2\Psi + \eta\Psi = 0, \eta = \left(\frac{\xi}{\xi_n}\right)^2$$

実際に解く方程式

$$\left\{ \begin{array}{l} \frac{\partial \Psi}{\partial t} + iV\Psi + (-i\nabla - \mathbf{A})^2\Psi - \Psi + |\Psi|^2\Psi = 0 \\ \frac{\partial \Psi}{\partial t} + iV\Psi + (-i\nabla - \mathbf{A})^2\Psi + \eta\Psi = 0, \eta = \left(\frac{\xi}{\xi_n}\right)^2 \\ \sigma\nabla^2 V = \frac{i}{2}(\Psi^*\nabla^2\Psi - \Psi\nabla^2\Psi^*) - \nabla \cdot (|\Psi|^2\mathbf{A}) \\ \left(J_s = \frac{i}{2}(\Psi^*\nabla\Psi - \Psi\nabla\Psi^*) - |\Psi|^2\mathbf{A}, J_n = -\sigma\nabla V \right) \end{array} \right.$$

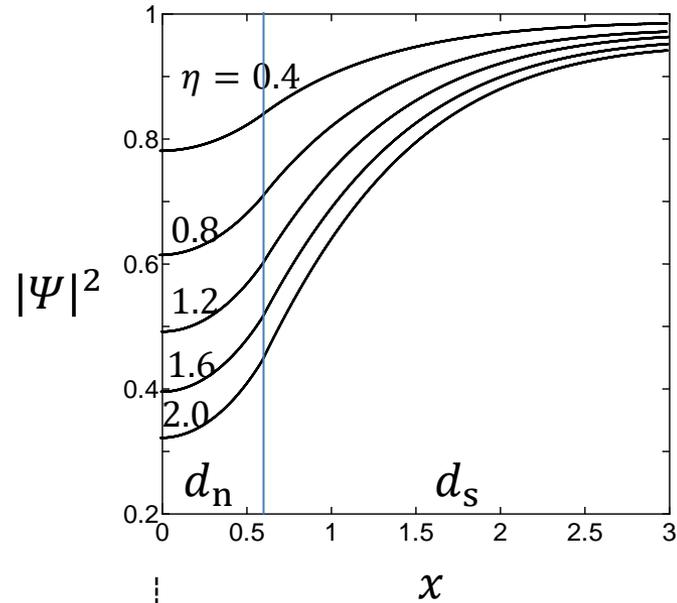
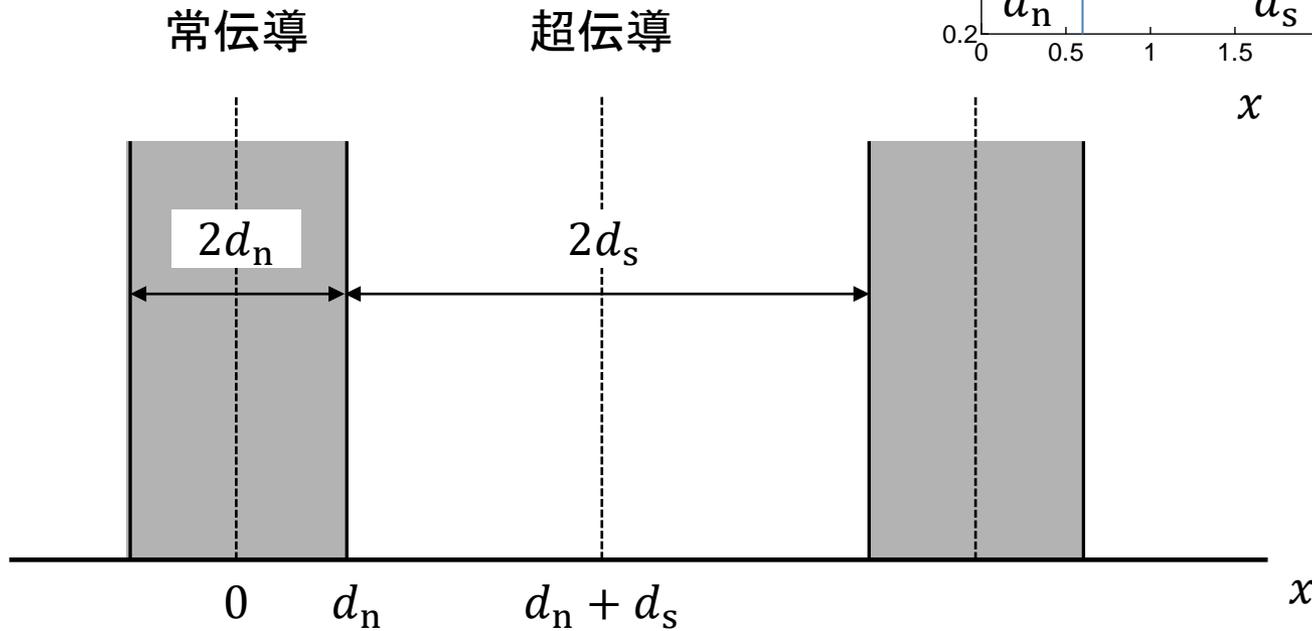
ξ_n : 常伝導領域のコヒーレンス長

第一方程式: 超伝導領域の Ψ について

第二方程式: 常伝導領域の Ψ について

第三方程式: V について

近接効果



$$\eta = \left(\frac{\xi}{\xi_n} \right)^2$$

$$d_n: 0 \sim 0.6$$

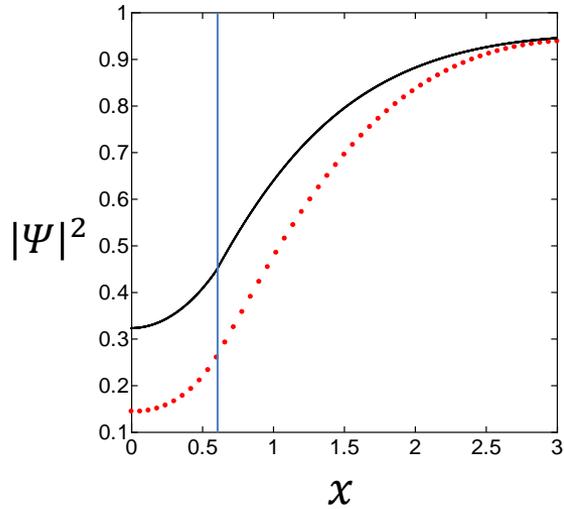
$$d_s: 0.6 \sim 3$$

規格化

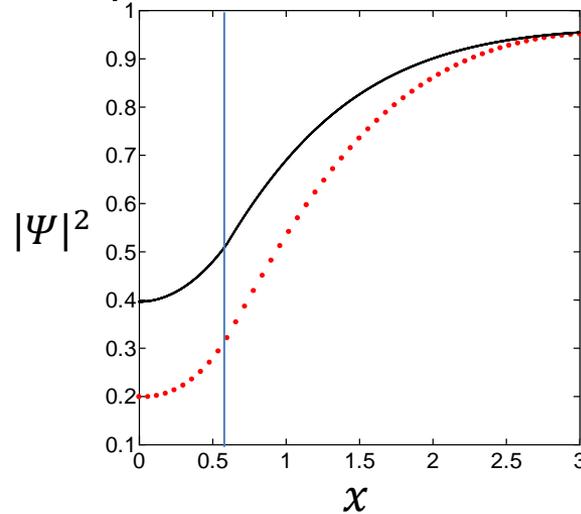
$$\frac{1}{\xi} x \rightarrow x$$

E.S. Otabe and T. Matsushita, Cryogenics (1993) 33 531-540

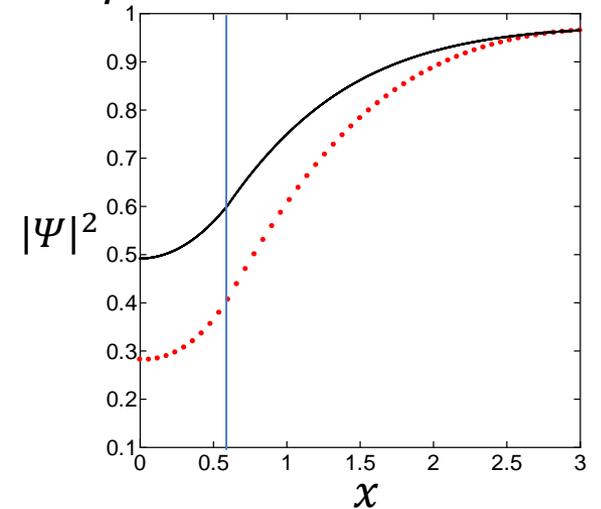
$\eta = 2.0$



$\eta = 1.6$



$\eta = 1.2$



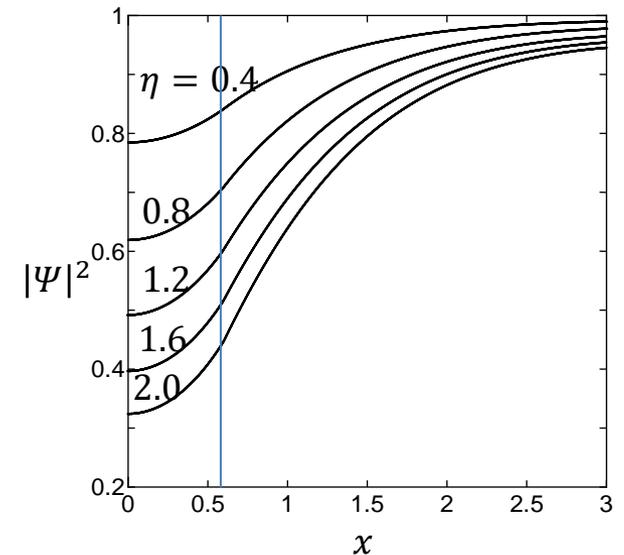
規格化

$$\frac{1}{\xi}x \rightarrow x$$

$d_n: 0 \sim 0.6$

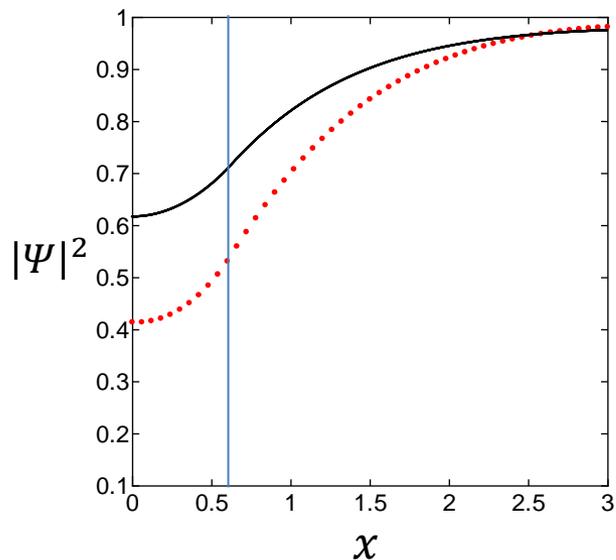
$d_s: 0.6 \sim 3$

図の実線は過去の研究から引用*、
点線はTDGLシミュレーション

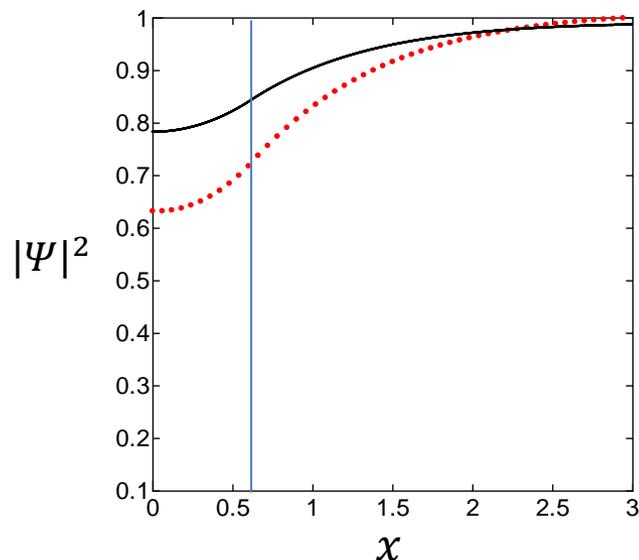


(*)E.S. Otabe and T. Matsushita, Cryogenics (1993) 33 531-540

$\eta = 0.8$



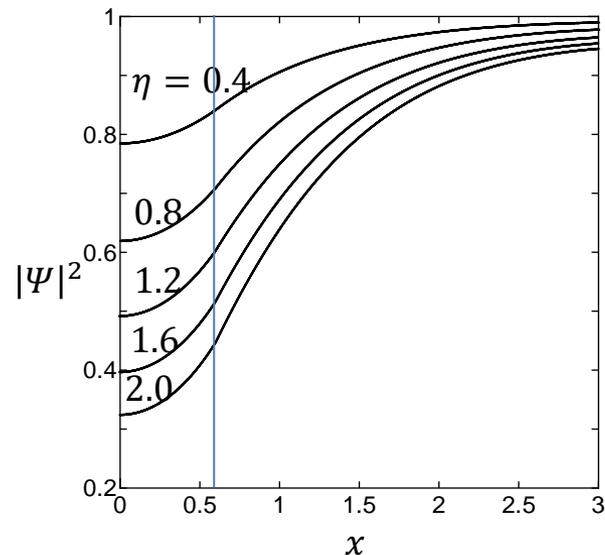
$\eta = 0.4$



規格化
 $\frac{1}{\xi}x \rightarrow x$

$d_n: 0 \sim 0.6$
 $d_s: 0.6 \sim 3$

図の実線は過去の研究から引用*、
点線はTDGLシミュレーション



(*)E.S. Otabe and T. Matsushita, Cryogenics (1993) 33 531-540

まとめ

- 簡易化した3次元のTDGL方程式をシミュレーションを用いて解いて、 J_c - B 特性を明らかにした。
- 常伝導部 $\Psi = 0$ に代わる方程式を導入し、近接効果が表現できていることを確認した。
- 常伝導部の配置や大きさなどを変更して J_c - B 特性を調査する必要がある

